

## 緊急雇用創出事業を活用した思い出回収事業 ～宮城県山元町～

### 1 調査対象と取組の概要

ヒアリング先	宮城県山元町 危機管理室 思い出サルベージ
取組のポイント	<ul style="list-style-type: none"><li>▶ 被災地で、持ち主不明の写真の整理やデジタル化や、遺影用の写真に対するニーズがあることを知ったボランティア団体「思い出サルベージ」が、山元町に提案し、平成23年5月より写真・アルバムの回収、洗浄・整理、被災者への返却の活動を始めた。</li><li>▶ 数多くのボランティアが活動に関わったが、作業量が膨大であることから、活動開始と同時に、緊急雇用により臨時職員を採用した。</li><li>▶ 平成23年5月下旬に開始した当初は、女性5名を採用した。震災後、がれき処理など男性向けの雇用が多い時期に、女性の雇用を創出できたという点が特徴としてあげられる。今年度は、写真や思い出の品の整理も進み、事業規模の縮小や変更があり、男女2名ずつの4名体制となっている。</li></ul>
ヒアリング日時	平成24年12月19日

### 2 活動・事業のきっかけと準備

#### ボランティア団体「思い出サルベージ」による情報支援活動がきっかけ

- ✓ 日本社会情報学会若手支援部会（JSIS-BJK）の災害情報支援チームは、平成23年4月にサブプロジェクトとして「思い出サルベージ」を立ち上げ、ボランティアで避難所へのパソコンの設置やインターネット環境の整備、災害ラジオ「りんごラジオ」のブログ作成などを開始した。
- ✓ 被災地でパソコンのメンテナンス等の活動を行う中で、津波で多くのものを失った中、遺影用の写真を求めていたり、写真の整理やデジタル化をしてほしいという被災者のニーズがあることがわかった。
- ✓ また、山元町では、震災直後から自衛隊や消防団の活躍で、写真約15万枚及びアルバム類約7,500冊、合計約70万枚のほか、位牌や賞状などの持ち主不明の品が自衛隊の大型トラックに約4台分、小学校の体育館に集められていた。そこで、「思い出サルベージ」から町に対して、写真を中心とした品々の整理・返却をしないかと提案した。
- ✓ その結果、同年5月、町では、「思い出サルベージ」の協力を得て、写真のデジタル化を進めることとした。また、位牌や遺影、賞状などの思い出の品は町の直轄事業とし

て整理することとした。データ・写真の帰属権は町に、返却業務を「思い出サルベージ」に委託するという形をとっている。

- ✓ 「思い出サルベージ」は平成 24 年 9 月より任意団体となっている。町からの資金提供は受けておらず、活動費用はメンバーの持ち出しである。使用機材は、各種助成金等を活用して購入したり、企業の協力を得ている。

### 3 活動・事業の内容

---

#### 写真・アルバム類の回収事業

- ✓ 平成 23 年 5 月から、庁舎敷地内にある、ふるさと伝承館にて写真・アルバム類の整理作業を開始し、同 6 月 21 日から展示・返却を開始した。
- ✓ 事業の主な内容は、写真・アルバム類の洗浄、ナンバリング、デジタル化、デジタルデータの検索システム開発やカタログ作成など返却のための工夫、展示、デジタルデータまたは印刷での返却・配布となっている。
- ✓ 検索システムには、キーワード検索のほか、顔画像認識機能があり、本人や写真データを読み込んで該当する写真を探し出すことができるなど画期的なシステムになっている。また、パソコン操作に慣れていない人でも探しやすいように紙ベースでのカタログも作成した。
- ✓ また、町内の幼稚園、小中学校の卒業アルバムを各年分そろえ、無償で印刷配布できるようにした。卒業アルバムをそろえておくことで、写真を探しに来た人が一つでも持ち帰ることができる可能性が高くなる。
- ✓ 展示や返却は、通常ふるさと伝承館で行っているが、平成 24 年度からは「出張写真返却会」をはじめ、同年中に仮設住宅 8 か所で合計 9 回、その他イベントを 2 回開催した。山元町では集落ごとに仮設住宅に入居しているため、仮設住宅での返却会では、検索機能ではなく、カタログを見ながら、町民で手分けして探す方が効率的に探すことができ、来訪者の 7～8 割が何らかの写真を持ち帰ることができている。

## 出張写真返却会案内ポスターと返却会の様子



### 緊急雇用創出事業を活用した雇用創出

- ✓ 写真を洗浄しデジタル化するだけでも非常に膨大な作業であり、「思い出サルベージ」の中心メンバー約 15 名と全国からの臨時ボランティア延べ 800 名程度が関わったが、それでも対応しきれないほどの作業量であった。
- ✓ そこで、町が緊急雇用創出事業を活用して、写真・アルバムの整理だけでなく、位牌や遺影、賞状、ランドセルなどの思い出の品を含めて整理を行う職員を雇用することにした。
- ✓ 職員を採用する際に、「思い出サルベージ」からの要望として、写真一枚一枚の洗浄や修復のように作業が非常に細かく繊細であることから、なるべく女性スタッフを多めに確保してほしいということがあった。また、写真の洗い方、デジタル化、データベース作成などパソコンを使う作業が多いことから、若者やパソコンの扱いに慣れている人を確保してほしいという要望もあった。
- ✓ 雇用者数は事業規模に応じて変化してきているが、平成 23 年 5 月下旬に開始した当初は、女性 5 名を採用した。震災後、がれき処理など男性向けの雇用が多い時期に、女性の雇用を創出できたという点が特徴としてあげられる。その後、退職や追加採用を繰り返して、同年 7 月には男性 2 名、女性 6 名となった。今年度は、写真や思い出の品の整理もだいぶ進み、事業規模の縮小や変更があり、男女 2 名ずつの 4 名体制となっている。
- ✓ 今までに雇用した方の年齢層としては 30～40 歳代が中心であった。
- ✓ 雇用条件は、被災した失業者で、週 5 日勤務のフルタイム（現在は週 4～5 日）勤務、日給 5,400 円（平成 24 年度）とした。

## 作業風景



## 4 活動・事業の成果と課題

---

### 写真のデジタル化と検索システム導入による高い返却率を実現

- ✓ 平成 24 年 9 月末までの延べ来館者数は 4,348 名、そのほか出張返却会は 700 名程度が利用した。返却率の高かった事業開始当初や仮設住宅での出張返却会では、来館者のうち 7~8 割が、写真や思い出の品を見つけることができた。独自に開発した検索システムやカタログを通じて写真を探しやすくしたこと、また幼稚園や小中学校の卒業アルバムをそろえたことが大きいと考えられる。
- ✓ 来館者から、「写真が手元に戻ったことで、自分の足跡も取り戻したような気がする」という声が聞かれたり、出張返却会では、ふるさと伝承館まで足を運ぶことが難しい高齢者も参加することができ、いずれも町民に喜ばれている。

### 今後の事業運営の課題

- ✓ 写真など現物の劣化が進む中、いつまで現物を保管するのか、町としてどのように事業を継続していくかを考える必要性が出てきている。平成 25 年度以降の事業の体制や、緊急雇用のスタッフがいつまで維持できるかなど、今後の課題は多い。